早稲田商学第341号
平成2年10月

「メンデル家12人兄弟館の書」について(11)

(第2巻，第2部・第3部)

坂本信太郎

はじめに

前稿に引続いて121. から180 v. までの，17世紀後半の入所職人120葉ほどの紹介・解説を行う。これで「メンデル家」本1，2，3巻の大部分に就いての紹介が終わる。あとにまだ「メンデル家」本の約1/4と「ランダウアー家」本2巻が残ることになるが，出来るだけ速やかに通読・調査を完了させ，その全貌紹介の責を果たしたいと考えている。

17世紀に入ってからの兄弟達について次のような点に気がつく

1) 入所者の職種に可成りの変遷が見られる。

2) 図に描かれている諸道具，技術内容は時代の進展にも拘らず旧態依然の状態に留まっている。

3) 「問題のない人物」という開館当初の入所基準から外れた行状の兄弟達が目立つようになってきている。

これらは何れも興味ある変化で，一考を要するものである。後日改めて取り上げたいと思っている。

1. 「メンデル家12人兄弟館の書」

121. 左官屋と肖像画家 **Fig. 91**

壁塗り職人の Partolme Trautmann は1641年 3 月 8 日，70歳の時入所。1658年 9 月17日，88歳で死去した。当館にはあと 1 週間で18年間の在所になる筈であった。558番目の兄弟である。

頭の禿げ上がった，白い山羊髭の彼はベンチに座し長テーブルに右肘を載せて正面を見詰めている。縁に刺繍のある飾り衿をし，ぴっちりと制服を着用し，カプチン頭巾をデフーブルにした姿である。テーブルの端，彼と向いあってラフ飾り衿の肖像画家が厚い表紙で装丁してある大型の画帳をひろげて彼を写生している。

メンデル家本の図は初めの部分（商学302号，p. 176参照）を除いては，

Fig. 91 左官屋と肖像画家
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, **121**, Stadtbibliothek Nbg.)

このように多数の画家（何れも無名である）が一人一人写生したものである。彼が肖像画を描いてもらっている部屋は，兄弟館の広々とした居間で，暖炉がありブッチエンガラスの入った窓が多数ある明るい部屋である。窓側の壁面には十字架上のキリスト像が飾られている。メンデル協会の文書には館の居間の備品についての記録が保存されているが，それによると，ピカピカのベンチ，引き出しが14ヶもある食卓，肘かけ椅子などの家財道具が備わっていた事が分かる。この図の向かって右側に，この記録に出てくる食卓や其の他の家具が置かれているのかも知れない。とにかく，この図は館の居間の様子を垣間見せる唯一のもので貴重なものである。

121v.　真鍮細工師　**Fig. 92**

真鍮細工師の Jacob Geiger は1641年８月６日，64歳の時入所。1649年12月

Fig. 92　真鍮細工師
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **121 v.**)

27日，夜中の２時，肺結核で死亡。72歳であった。当館には８年４ヶ月と５日の在所。559 番目の兄弟である。

三本脚の椅子に座し，痩せこけた親方の彼が，ネヂ万力にくわえた真鍮の燭台にヤスリをかけている。ヤスリは大変に目が粗く，その柄は手首に革紐で固定されている。作業台には完成された燭台と，先端が細く針のようになっている真鍮製手押し携帯用消火ポンプが並んで置かれている。古い警察規則によれば火災の時には消防士は一人一人がこの消火ポンプを２本持ってかけつけることになっていたらしい。彼の着用しているラフ飾り衿はよれよれのみすぼらしい状態になっているが，前にはコテをかけてピンとしていただろう。下着の腕をまくり上げ，大きな長い白い前掛けをして作業しているが，どことなく弱々しい。

戸外には２人の人物が描かれているが，これは元気な若い頃の彼の颯爽とした姿で，それに続く人物は彼の息子を示している。これは彼の脳裏に浮かんだ思いで深い状景（いわゆる記憶心像）を描いているものなのである。

122. 桶屋

桶屋の Hantz Beuerlein は1642年２月２日，65歳の時入所。1651年３月16日，夜12時，74½歳で死去。痛風であった。当館には９年２ヶ月と４日の在所。560番目の兄弟である。

きちんとコテのかかった大きなラフ飾りを着け，下着の腕をまくり，袖無しのジャンパースカート風の作業服を着ている。今輪形に曲げたひごを片足で押さえながら，合わせて目に紐を巻きつけて桶のタガをつくっている最中である。作業台上には白身の木材でつくられた一対の手かけのある浅い桶と，タガ締め用のハンマーがある。彼の周辺には桶材を割り出す為のナタと大きな木槌があり，背後の壁面には大きなコンパス，曲りきり，鉞（セン）が掛けてある。亦尺棒も見られる。

[註] 彼の職業名は Weiss Büttner と記されている。白い桶屋ということになるが，これでは良く分からない。専ら白い色の高級な木材で桶を造る桶屋の事を指すのであろうか？　Weiss Büttner に対し，Schwarz Bütter という職業名もある。これ亦分からない名称である。黒味或は赤味の柔らかい安い材料で桶をつくる職人のことを指すのだろうか？　或は公認された規格容量の桶を造る職人のことを Weiss Büttner と称し，そうでない桶を造る職人を Schwarz Bütter と呼ぶのだろうか？，御教示頂ければ幸いである。

123.　仕立屋，当館の管理人

仕立屋の Hannß Jacob は1644年３月４日，当館の管理人として来所し，1650年４月13日まで，６年６ヶ月と３週間にわたってその任務に従事した。

彼はキャップを斜めに小粋にかぶり，レースの縁飾りのついた幅広の白い衿を出し，細かい流線模様が織り込んであるしゃれた生地の服を着ている。上着の袖は大きく折り返されたカラー袖になっている。首元から胸元までボタンが連なり，最後のボタンの部分は締め紐を蝶結びにして飾り立ててある。ズボンは膝頭までで，飾りリボンで締めている。高いヒールの靴も飾り紐がついたしゃれたものである。

耳に筆記用のペン軸をはさみ，左手に管理人の象徴である沢山の鍵を束ねた輪を持ち，半地下式食糧庫に通ずる石積の玄関に，いかにももったいぶった顔付をして立っている。足下の石敷の中庭には，鞭を肩にかついだ馭者が，縁なしのフェルト帽を摘み上げて，彼へ挨拶しながら指示を受けている。馭者は粗末なシャツとズボン，そして革製のコートを羽織っている。ズボンには大きなコッドピース [誇張して盛り上げてある局所覆いである。(ブラゲッタとも言う。商学335，p. 202，**Fig 58** 参照)] が目立っている。石積の壁の向こうに "Kartäuser gasse" を隔てて館の礼拝堂が見える。

123 v. 襲毛工

襲毛仕上げ工の Konradh Schneidewind は1644年 4 月18日，73歳の時入所。1654年 8 月15日死去した。彼は大変な嗅ぎタバコの常用者であった。入所後，館の風紀委員を勤める。561番目の兄弟。

ブッチエンガラスの入った窓のある板張り壁の作業室で，キャップをかぶり腕まくりをした彼が台上に広々とひろげたラシャ地を刈り込み鋏で美しく仕上げている。この作業図では，右手首に革バンドをさしこんで鋏を操作しているが，これはM-Ⅰの90 v .(商学309号，p. 284) の **Fig. 93** と相違している。これでは調子よく作業を進められないであろう。

124. バルヘント織工

バルヘント織工の Niclaus Wamb は1645年 5 月 5 日，76歳の時入所。1646年 2 月17日に死去した。9 ヶ月と12日程の在籍であった。562番目の兄弟である。

鉄の枠の入った窓の傍の織機に向かって作業している。この図の織機は画家が織機を知らずして画いているので，これでは布を織ることは出来ない。バルヘント織とは綿と麻の交織布で，裏をけば立ててある。フスティアン織とも言っているものである。

124 v. 縁飾り紐作り

縁飾り紐（モール）作りであり，亦市民防衛砲兵隊の砲術手である Ott Friederig は1645年 8 月25日，67歳の時入所。1656年 4 月18日死去した。館にはあと 1 週間で10年 8 ヶ月の在所になるところであった。563番目の兄弟。

彼は市庁舎の塔の上，胸壁のような場所に立っている。キャップをかぶり，館の制服をきちっと着用している。ズボンは膝頭のところで結んで締めている。そしてすねの部分はホックでぴったりと締めた脚半をしている。右手に火縄の巻きついている大砲の点火棒を持っている。点火棒の末端は鋭い石突きになっ

ている。彼の傍のX字形の脚の机上には彼が作った種々な色の縁飾り紐が置いてある。

125.　刺繍用糸調整職人兼革袋物製造人　**Fig. 93**

刺繍用糸調整職人であり，革細工職人でもある Hanns Zauscher は1646年3月9日入所。1655年10月17日の夜8時から9時の間に死去した。彼は亦，市民防衛隊に鼓笛隊フルート奏者として加わって居り，大変な名手で，54歳の時には市委員会から誉め称えられた。

石積みの壁，タイル張りの床，X型脚の机の上に，手首の長い革手袋を重ねて何組も置いてある。この手袋には見事な刺繍が施されている。革袋物製造職人としての彼の製品である。彼の左手には，両端が束ねられている美しい色彩のウール糸が下げられている。これは彼が Zöpffmacher であることを示すもの

Fig. 93　袋物職人，フルート奏者
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **125**)

である。Zöpffmacher とは糸を刺繍用糸として，きめられている長さにきちんと切り分ける職人なのである。彼はキャップを斜めに小粋にかぶり，細かく折られているラフ飾り衿を二重にしている。ぴちっとした長袖の上着は胸の部分及び両上腕部にかけて大きくスラッシュが入っている。この服装で得意満面の顔付で自分の製品を誇示している。亦戸外の石敷の路には鼓笛隊員としての彼の姿が異時同図で画いてある。ツバ広のラシャ帽子を被り，腕にスラッシュの入った服を着，見事な長剣をつり下げ，今自慢のフルートを奏している。遥か後方にはカールスブルグが見える。

125 v.　貴金属細工人　**Fig. 94**

貴金属細工人の Niclauß Emerling は1646年 8 月19日，54歳の時入所。1655年 3 月27日，夜の 3 時から 4 時の間に死去した。63歳であった。館には 9 年間

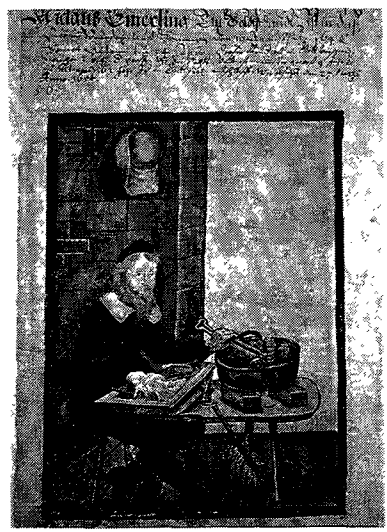


Fig. 94　貴金属細工人
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **125 v.**)

在籍した。565番目の兄弟である。

細長い楕円形の作業机の一端が細くえぐられていて，その部分にまたがって彼が座している。机上に2枚のレンガを置き，その上に両手付の鉄製の浅い火鉢が据えてある。彼は炭つかみの様な大きなピンセットにはさんで細工中の金製足台つきコップを焙（ナマ）している。コップは花びらの形に打ち出されている。打ち出すうちに金属が固くなるので，時々焙して柔らかくしながら細工を続けるのである。火鉢の手前，彼の膝の位置には縁の広い長方形の作業箱がある。この箱の中でヤスリをかけたり，打ち出しをしたり，磨いたりの細工が行われている。そして貴金属の削り粉や，切り屑等がすぐ回収出来るようにするのである。今彼はなました細工品を皮布で磨こうとし右手の掌に皮布をひろげて持っている。箱の中には，細工した品物の溝の部分や凹部を掃くための変わった形のブラシが見られる。亦作業机の傍には貴金属粉を静かに掃き集める為の羽根箒が立てかけてある。彼は館の制服になっているカプチン頭巾を着けていない。

仕事場の石壁の一部がはげ落ちて，中の煉瓦が見られる。先ず煉瓦を積み上げ，次いでしっくいを塗り，目地をつけて石積み壁のように装っている構造がよく分かる。

126.　ビール作り下働き

ビール醸造下働きの Ulrich Lederer は1647年10月25日入所。10年間在所し，1657年，夜7時に死去。72歳であった。566番目の兄弟。

広幅の丸衿の飾りを着け，館の制服を着ている。カプチン頭巾をデフーブレにし，大きな前掛を締めている。ビール醸造用の長柄のひしゃく桶を手にして，ホールの入口に立っている。

126 v.　真鍮細工師，飲み口作り

樽の飲み口作りであり，役所の使丁を20年の長きにわたって務めた Hanß

Eckerth は1650年 2 月 6 日，72歳の時入所。1652年夜の11時から12時の間に死去した。567番目の兄弟である。

この真鍮製の飲み口はニュルンベルクの主要な交易品であった。先ず粘土，陶土や砂を用いて飲み口の鋳型を作り，その砂型中に熔融金属を流し込んで飲み口の素材を作る。鋳造物にはきまって鋳型から洩れた金属が薄い鋳張りになってついているものである。彼は今，作業台に取りつけられているねじ式万力に飲み口素材を挟み，目の粗いヤスリをかけ，鋳張りを取り除き，同時に磨きをかけて仕上げているところである。

戸外には，広つばのフェルト帽を被り，腰まである長い外被を着て，長槍をかつぎ，公文書の入っている円筒状の包みを背負い，森のわきを走っている彼の使丁としての姿が異時同図で描かれている。

127. 養蜂家 **Fig. 95**

養蜂家の Leonhardt Gabriel は1650年 9 月 4 日入所。そして1659年まで館の管理人 (Schaffer) を務めた。彼は大変な天の邪鬼で，他から指図されることが大嫌いであった。同時に抜け目のない人物であった。そのことは図にみられる容貌からうかがえよう。彼は新教徒であり，ニュルンベルク市民である。

重厚な石積みの壁，豪華な飾り錠と飾り蝶番のついた館の食糧庫の扉の前に立っている。キャップを被り，レースの縁飾りの白い衿をつけ，美しい紐で衿元を締めている。ぴったりした館の制服の上着と半ズボンを着用。上着には飾りホックが沢山ついている。半ズボンは膝頭のところでリボンを大きく結んで締めている。

右手に大きな錫製水差しを持ち，その手首には皮バンドに通した鍵束が下がっている。そして左手で大きなライ麦のパン塊を抱えている。入口の天井に近い棚には藤を編んで作った養蜂籠が並び，蜜蜂が元気に出入りしている。

背景には緑に萌える木々がそばだつ美しい野山が見られる。山林耕地の管理

Fig. 95　養蜂家，管理人
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, 127)

人でもあった彼が華美な飾りリボンを両側につけた帽子を被り，一方に水筒，他方に短剣を下げた二本のバンドを両肩に交差させて掛けている。そして右手にはやや大きめの角笛を持ち，左手に，はやる犬の手綱を握っている。奥の木立ちの切れ目から見事な大きな角の鹿が悠々と姿を現わしている。彼は狩猟に際して勢子の役を果たしているのだ。

管理人を意味する Hofmeister と Schaffer の間の違いを画家達は服装の相違で示しているようだ。Schaffer にはスラッシュの無い，ラフ飾り衿の無い流行遅れの上着，少しだぶついた半ズボンを膝の所でバンドで細く締めている服装に画いている。

127 v. 鍵作り

鍵作りの Ulrich Friederich は1651年 4 月22日，80歳の時入所。1653年12月24日，午後 1 時から 2 時の間に死去した。82歳であった。568番目の兄弟である。館には 1 年半と12週 5 日間の在所であった。

十字形の木枠の入ったガラスのない窓に面して作業机が据えてあり，彼はねじ式万力に鍵を挟み，レンチで締めつけている。手には目の粗いヤスリを握っている。ラフ飾り衿をし，カプチン頭巾をデフープレにし，頭にはキャップを載せている。頭上の壁につば広のラシャ帽子が掛けてある。キャップの上にこの帽子をかぶるのである。

128. 女子料理人

Ottillia Stüdtlerin は1651年11月10日，若しくは11月 1 日の万聖節（一寸定かでない）に女子料理人として館に来た。67歳の時である。そして1655年 2 月 3 日，料理人を辞して去った。

髪の乱れを防ぐ大仰なヘアバンドをつけ，白いシャツの両腕をひじまでまくり上げた彼女が今調理場から隣室の食堂へビーンズスープが一杯入った皿を運んで行くところである。食堂には既に兄弟達が白いテービルクロスを掛けた食卓を前にして座しているのが見える。彼女の胸元はコルセットで，きちっと紐で緊縛してあり，踝（クルブシ）がかくれるほど長いスカートをはいている。そのスカートと同じ長さの前掛を掛け，更にもう一枚膝頭位までの前掛けを二重に重ねている。幅の細い布を首に巻き，胸のところで交差〔ホールター・ネックライン (halter neck line)〕させ，上着がだぶついて仕事の邪魔にならないようにしている。調理室に通ずるアーチ型の出入口の上の棚には壺が伏せて並べてあり，奥の台処にはフードつき平炉がまに火が燃えさかり，傍の壺を熱している。

128 v.　梳毛工

梳毛工の Jacob Wagensteehl は1653年1 月28日，75歳の時入所。1656年 4 月24日死去。3 年間の在所であった。569番目の兄弟。

石積みの部屋，鉄格子の入った窓際にベンチと作業台を置いて梳毛作業をしている。針を植えた梳毛板（商学313号，p. 220, **Fig. 136** 参照）を両手に持って，羊毛を梳いている。作業台上にはこれから梳く毛玉や，梳かれて繊維が整然とそろった毛が置かれている。

129.　左官屋

しっくい塗りの Wolf Winter は1654年 1 月30日，80歳の時入所。1654年 4 月15日，僅か10週間と一日程の在所で死去した。誠実で信心深い人物で館の規律委員を務めた。570番目の兄弟である。

山の裾周りに飾り玉のついたしゃれたつば広フェルト帽子を被り，衿元をラフ飾りで覆い，ゆったりとした長いマントを着て立っている。

右手に黒表紙・天金の小型本を持ち，宝珠の載っている金の十字棒を，もったいらしく左手の指先につまみ上げて見せている。宝珠の部分には大粒の宝石が輝いている。彼の背後の部屋には優美な曲線に仕上げられた四脚テーブルが置かれていて，天金赤色表紙の大きな本か或は帳簿冊子が置いてある。規律委員としての偉厳が充分に窺える図である。

129 v.　キリスト昇天のミニアチユール

130.　紋章

1655年 Kressenstein の Jobst Christoff Kress 閣下がメンデル家12人兄弟慈善財団の理事者となられた。そして閣下は1663年死去された。従って在任期間は1655年から1663年迄の 8 年間であった。図には紋章のみで肖像はない。

Kressenstein 出身の市参事会員 Jobst Christoff Kress の紋章（彼は1597年 1 月 8 日生まれで，1663年の 7 月 7 日没である）と彼の夫人 Maria Sabine 旧姓 Kormburg の Rieter の紋章が草の茎に囲まれて描かれている。

130 v. 女子料理人

1655年 2 月 7 日理事者になられた Jobst Christoff Kress 閣下が12人館に，女子料理人 Margaretha Murrerain をつれて来た。彼女70歳の時である。そして1658年まで勤務した。

市松模様のタイル張りの台処の隅にフードのついた平炉がまが設けられている。炉の下部の薪溜めにはぎっしりと薪がつまっている。炉の上面には鉄製の薪置が置かれていて，薪が燃えている。フードの縁には柄付土壺が伏せてずらりと並べてある。炉の側のしっくい壁には木製のスプーンを插したスプーン掛けと塩を入れた木製の小箱がさがっている。炉に対している壁面には錫製皿が沢山何段にも並べてあり，その前に配膳机が据えつけられていて，皿が置いてある。今彼女が壺からスープを盛り分けている。台処の扉の向こうは館の食堂らしく長机が見える。扉の上部の壁面にはフライパンが整然と掛けてある。彼女の服装は128の場合と同じ様であるが，ラフ飾り衿をしている点と，前胸部分が鎧の様なチョッキになっている点が異なる。

131. 馭者

馭者の Ulrich Brüner は1655年 1 月15日，66歳の時入所。1660年 7 月 9 日，水腫によって死去した。571 番目の兄弟である。

立派な革製の首輪の近代装備をつけた馬が，鉄のタイヤをはめ，鉄のスパイクのついた 2 輪の荷車を引いている。彼は青葉を飾りにリボンに挿したつば広帽子を被り，ラフ飾り衿をし，革の上着を着て，足に脚絆をつけている。

131 v.　釘製造人

釘作りの Georg Heeß は1655年２月12日，73歳の時入所。1663年３月24日，真夜中に死去。572番目の兄弟である。

補強の為めに上・下の部分に鉄のタガをはめた木台に据えられた金床で，真赤な鉄を打ち伸して釘作りに励んでいる。

132.　左官屋

左官屋の Steffan Waltz は1655年６月18日，76歳の時入所。1656年５月26日，77歳で死去。館には１年11ヶ月と３週間在所した。573番目の兄弟である。

禿げた頭にキュロット（キャップ）をぴったりとのせ，ラフ飾り衿をつけ，上腕部と胸まわりにスラッシュの入った長袖上着を着ている。右手にコテ，左手にはしっくいを載せたしっくい受け板と刷毛を持ち，石を積んだ胸壁に歩みつつある。胸壁には足場が巡らされている。今この部分を塗装しているのであろう。羽根飾りをつけた広つば帽子を被り，肩帯に剣を吊るした将校らしい兵隊が巡回ししている。

132 v.　靴屋

靴屋の Hieronimus Biederman は1655年９月３日，86歳の時入所。そして1657年12月13日の真夜中，88歳で死去。館には２年３ケ月と10日の在所であった（書記は３年に２週間と３日不足であったと記しているが誤りである）。大変なタバコ好きな人物であった。574番目の兄弟である。

扉の蝶番金具の立派さが目立つ仕事部屋であるが，窓にはガラスが入っていない。窓外に見える山の図からすると高い処にある部屋らしい。キュロットを被り，シャツの腕をまくり上げている。首に細紐をまわし小さい胸当を着け，大きな前掛けを締めている。今出来上つた短靴から木型を抜き出している。作業机の上には半月包丁，キリ，曲りキリ，そして出来上った片方の靴が見られ

る。窓際には完成品の靴一足，そして床に白と黒のコンビのしゃれた長靴一足が置いてある。どの靴にも明らかに踵がついている。壁面の桟には3組の木型と靴屋専用の採寸尺がかけてある。

133. 食料雑貨商人 **Fig. 96**

商人の Hanns Sckwinger は1655年11月12日，78歳の時入所。1658年8月19日の夜中死去。館には2年9ケ月と1週間の在所であった。

彼は館の風紀委員を務めた。575番目の兄弟。

床も，壁も窓枠も窓格子にも木が使用されていて，壁板の木目の大変見事な事務室である。グリーンの布で蔽われたX字型脚のテーブルには適度の傾きを持った書写台が見られる。背もたれのある椅子に座し，彼は今書写台上にひろげた大型の帳簿に記載しているところである。テーブルの前面の板壁には紐が

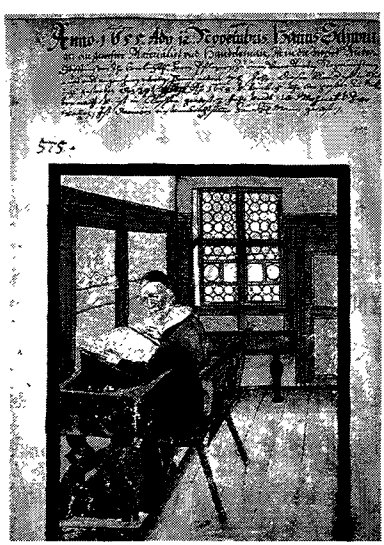


Fig. 96 食料雑貨商人
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, **133**)

2条張ってあり，その紐に取引のメモを記した伝票紙片がいくつも差し挿んである。このメモを見ながら記帳が進められている。

キュロットを被り，幅広のカラー衿の長袖上着を着ている。上着の袖口と裾周りにはビロードが飾りに張りつけてある。豊かさを感じさせる身なりである。

133 v.　粉屋　**Fig. 97**

粉屋の Eberhart Hagen は1656年3月3日，66歳の時入所。1659年11月17日死去。576番目の兄弟である。

石造りの倉庫の壁に粉の入った麻袋が2袋立て掛けてある。彼は今，もう一つの粉が一杯になっている袋の口をきっちりと締めているところである。キュロットを被り，縁を色どりした広幅の白カラー衿の長袖上着，そして半ズボン姿である。足許には鉄枠をはめた計量枡が伏せてある。石畳の道路を隔てて見

Fig. 97　粉屋
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **133 v.**)

える3階建の家は水車小屋であろう。入口の両側に大きな石臼がたてかけてある。

麻の粉袋には変形の十字架印が書かれているが，これはこの粉屋の目印，屋号である。商人や粉屋の主人は商品を梱包した運搬用の袋や長持，行李，樽などにこのような目につきやすい符号・記号を描いた。この印は亦，商人・行商人の自由を保証する証号でもあったと言われている。

134. 仕立屋

仕立屋の Marttin Steub は1656年3月5日，51歳の時入所。1658年6月11日，細君に看とられて死去した。577 番目の兄弟である。

彼は館の制服の上着を仕立ている。箱に座して仕事をしている彼の周りには，布屑が散乱している。

134 v. 十字飾り鍔作り

飾り鍔作りの Hans Vetter は1656年11月10日，73歳の時入所。1667年5月29日死去。

彼は飾り鍔作り最後の職人であった。578番目の兄弟である。

ねじ式万力と金床が据えてある木台を前にして，ラフ飾り衿，長袖上着短ズボン姿の彼が十字鍔の握り部分をハンマーで鍛造している。彼が座している三本脚の椅子の下に出来上った飾り鍔がころがっている。炭掴みが置かれている鍛冶炉は真赤に燃えさかっている。ハンマー，ヤットコ，ヤスリが壁面に整然と並んでいる。

135. 毛織物仕上げ工

毛織物仕上げ工の Niclaus Oßwaldt は1657年1月19日，57歳の時入所。1667年6月1日，夜中の1時から2時の間に死去。579番目の兄弟である。

天井から吊り下げた赤い厚地の生地を，両手に持ったおになべなの毛ば立て器で毛ば立てている。傍の壁には大きな刈り込み用バネ鋏が吊るしてある。彼は風変りな人物であった。鋭い目つきの隠気な顔つきによく現われている。余りよい身なりではない。織物関係の職人は大体において，低賃金でその地位は低かった。

135 v.　仕立屋

仕立屋の Hanns Stieger は1657年３月24日，60歳の時入所。1663年１月26日死去した。580番目の兄弟である。

壁も床も板張りの仕事部屋に，引き出しのある大きくて立派な机がある。その上でラシャ鋏で生地を裁断している。キュロットを被り，大きい白カラー衿の長袖上着を着ている。そして半ズボンを膝頭のところで派手にリボンを結んで締め，両側に穴をあけたしゃれたデザインの靴をはいている。

136.　日傭の屋根屋

日傭の屋根屋の Hannß Stadtner は1657年４月23日，75歳の時入所。1665年７月１日死去した。581番目の兄弟である。

八の字髭と顎髭は立派であるが，頭部は全く禿げてしまっている。ラフ飾り衿をし，長袖上着半ズボン姿で，彼の靴も亦前記の仕立屋と同様，両側に穴があけてあるしゃれたデザインのものである。この当時の流行であったのだろうか？　彼は右脇に赤いスレート瓦を数枚かかえている。瓦には屋根の横桟に引っかける舌がついているのが分る。左手にはスレートを欠いたり，桟に釘を打つ一端が尖がっているハンマーを握っている。足許には小さいしっくい桶と，左官梯子に桶を吊す為にひかっける金具が見られる。

石畳みの広場に面して，５階建ての急勾配な屋根の石積み建物がある。１階の天井は非常に高くなっている。そして上層２階部分は屋根裏部屋になってい

る。職人が1人この屋根に左官用梯子を峯から掛け下ろして足場にし，しっくい固めの作業をしている。梯子にひっかけ金具でしっくい桶を吊しているのが分かる。この家は何か商いをしていると見えて旗のついた棒を外壁に挿している。

136 v. 魚屋

魚採りの Heinrich Engelbrecht は1658年5月7日，71歳の時入所。1665年8月1日死去。582番目の兄弟である。

ラフ飾り衿をし，長袖シャツの上にチョッキを着ている。短ズボンで，長柄のタモで川魚をすくっている。傍には魚入れの小桶が置いてある。川原は草ぼうぼうで，廃虚になった石積みの門が立っている。

137. 銀線製造人

銀線引きの Nicolaus Khollman は1658年6月17日，53歳の時入所。1681年11月23日，結核で死去した。76歳であった。583番目の兄弟。

キュロットをぴっちりと被り，館の制服を着用して背もたれのある椅子に座して仕事をしている。テーブル上に固定されている心棒に，銀の粗線を巻きつけた銀色の小円柱をはめ，垂直に設置してあるダイスを通して，彼の手許の直径の大きな円板に巻きつけてある。この大きな円板の上面には2箇所 ⊓ 形の金具が打ちつけられていて，この金具にL字形のハンドルを挿し込み，円板を廻して銀線を所定の太さに引き延すのである。彼は金線も曳くとみえ，テーブルの上には金の粗線を巻いた金色の小円柱が見られる。ダイス，ペンチ，ダイス穴磨き用鉄針，トンカチが雑然と置かれている。

137 v. 馭者

1頭立ての馬車の馭者である Joachim Friderich は1658年9月29日，65歳の時入所。1665年7月7日死去した。館の風紀委員を務めた。584番目の兄弟で

ある。

今彼は馬小屋から馬を戸外に引き出そうとして左手で手綱をひいている。飾りを兼ねたボタンが首から膝まで沢山つけてある長袖の長いコートを着ている。歯車型拍車の膝までのダブダブになっている長靴をはいている。右手に金製の台付き飾り壺を大事そうに捧げ持っているが，これは何の為であろうか不明である。

138.　女子料理人

女子料理人の Anna Maria Sölnarin は60歳の1658年10月13日，館の料理人として採用され，1660年まで勤務した。

白い長袖シャをまくり上げ，長いスカートをはき，2枚の前掛け，そのスカートと同じ丈のと，膝あたりまでの長さのとを二重に重ねている。髪は大きなヘアバンドで乱れを防ぐ為めに締めてあり，腰には鍵をいくつも通した紐を廻している。調理室の壁に3段に取り付けた棚には大小の錫皿が整然と並び，平炉のかまどのフードの縁には片手付の壺がこれ亦整然と並んでいる。かまど面上ではスープの入った数個の壺が火を取り囲んで煮えてる。側のテーブルには真鍮製スープ皿と味見用小皿，そして木製長柄のスプーンが載っており，テーブルの足元にはバスケット製の皿配び篭が置かれている。

138 v.　領主の下僕・馬丁

ニュルンベルク市の東方ノイハウス領からやって来た領主の下僕であり，馬丁の Hanns Hechner は1659年2月14日，60歳の時入所。1666年2月28日，結核によって死去した。館では風紀委員を務めた。585 番目の兄弟である。

白いカラー衿，ボタンの沢山あるコートを着て，拍車のついた膝までの馬丁用革長靴をはき，今野原で主人の馬を御しているところである。眉をよせ気むづかしい顔付をしている。

139. 水車大工

Katharinen 水車屋からやってきた水車大工の Michael Cracauer は1659年 2 月14日，60歳の時入所してきた。1667年 5 月21日死去した。586番目の兄弟である。(Katharinen 水車とはニュルンベルク市内 Katharinen 修道院の傍のペグニッツ川沿いにあった水車のことであろうか？)

彼は今教会へでも行こうとしているのであろうか，ラフ飾り衿のような大きな飾りカラーを着け，制服の上に大きなマントをまといカプチン頭巾をデフーブレにし，フェルト帽を手にして石積みのアーチ門の前に立っている。門を通して見える石敷きの街路上には，水車小屋から運び出して積み上げた粉袋が荷台にぎっしり重なった馬車が置かれている。亦，赤い屋根の水車小屋の前には大きな石臼の一部が見える。彼が水車大工であることを示すものは図中には見られない。

139 v. 桶屋

桶屋の Georg Beuerla が1659年12月 6 日，54歳の時入所。1668年10月 4 日死去。587番目の兄弟である。

幅広い白のカラー衿をし，ボタンの沢山ある長袖の長い上着を着けている。カプチン頭巾はつけていない。今大きな樽のタガを締めている。締め木も木のハンマーも今迄のものと異なった形のものである。四角形ハンマーで丸槌ではない。締め木も槌のあたる部分が球形になっている。

140. 女子料理人

女子料理人の Kunignde Neußin は1660年 5 月 8 日当館の料理人として採用され，1661年 6 月 5 日安らかに眠るまで勤務した。

調理室の左右の壁の棚には壺，錫皿，錫製ジョッキ，平底の鍋，タライがきちんと並べてある。平底の浅い鍋が出てきたのはこの図録中では初めてであろ

う。彼女の髪には極端に大きなヘアバンドがついている。首から胸前にかけて布をホールター・ネックラインに巻きつけている。

141.　管理人　**Fig. 98**

理事者の Jobst Christovs Kressen 殿の財団の事務に従事していた Georg Gottlieb Pömez は，1659年８月30日当館の管理人となった。信心深い人物で，22年間に亘って当館に勤務し，1681年９月11日，55歳で死去した。

フリルがついているゆったりした袖のシャツにぴったりとしたチョッキを着け，インバネスのような袖をしたマントを着ている。大きなつばのある帽子をかぶり，右肩から斜めにかけた縁に飾り布をつけた広幅バンドで細身の剣をつるしている。そして大きな目立つ白カラー衿を見せ，膝までの太めのズボンを

Fig. 98　管理人
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **141**)

はいている。そのズボンの下縁は飾り布でかがってあり，花結びのリボンまでついている。蝶結びの大きなリボンのある靴，ぴったりした靴下は膝頭のところで亦してもリボンで結び大きくたらしてある。如何にもしゃれた姿で同時に彼の職務の偉厳さを見せつけている。左手に革手袋を握りマントを押え，右手を腰に当てて気取って，開けはなたれた扉の前に立っている。

扉の向に眺められる風景は彼が前に仕えていた理事者の邸宅周辺の模様と思われる。弾丸の様な丸石を正四面体形に積み上げた飾りを載せた石の門柱が2本，小路に面している。小路の両側は草地になっていて，台石が点々と並べてある。その上に植木を植えた桶が置かれている。小路が切れたあたりに同じ格好をした赤スレート屋根の家が並んでいる。

142. 桶屋

桶屋の Michael Mertz は1660年 7 月23日入所。同年11月 8 日死去した。588番目の兄弟。

彼は今桶のタガを作るため輪にしたタガを針金で固く結びつけているところである。傍の大樽の上面には新しい形のハンマーと締め木が置かれている。

142 v. 帽子屋 **Fig. 99**

帽子作りの Mattheus Nißelは1660年11月12日入所。1669年10月 3 日死去した。71歳であった。館の風紀委員を務める。589番目の兄弟である。

立派な蝶番金具と鍵のついた半開きになっている扉の外面に，大きなフェルト帽子が掛けてある。看板であろう。板張りの仕事部屋の小ぢんまりとした作業台の上に，斜面の台を載せ，その上に針金製の梳毛器が載せてある。彼は両手を使って羊毛を梳いている。梳かれた羊毛はフェルト帽子用のフェルトになるのである。床上の編篭には梳き終えたふわふわした羊毛が一杯になっている。亦彼が作ったつば広の帽子がいくつも見られる。

Fig. 99　帽子屋
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **142 v.**)

中世ヨーロッパ・ゴシック期ではフード，コイフが男女共に使用した被り物であったが，ウールやコットン，フェルト，ベルベットで作くった柔かい帽子も愛用された。そして16世紀にはフェルトのキャップやベレー，ボンネットなどが市民の帽子となった。

動物性繊維をフェルト化して円錐形の大ざっぱな帽体がフェルト帽子の材料として売られている。フェルト帽子の帽体には羊毛で作った固くて重いが安くて実用的なウールフェルトの帽子と，兎の毛を原料としたファーフェルトの2種類がある。ファーフェルトは毛足の長さでベロア，トッペ，ドルビーに分かれる。帽体に糊を入れ，蒸気を当てて柔かくした物を型やサイズに合った木型に入れアイロンをかけてよく乾かして帽子にし，リボンや汗取り縁をつけて完成するのである。

143. 女子料理人

女子料理人の Martha Mülherin は1661年 6 月 5 日館の料理人に採用され，1663年の暮まで勤務した。大変心の温かい親切な人物であった。

前髪が乱れないように小形の半月形のヘヤバンドをしている。シャツを腕まくりし，首に太いリボンをホールター・ネックラインに巻き，その両端を前掛けの紐にはさみ込んでいる。平炉のかまど上に燃える火の傍にふたのついた壺が２ケ置かれているが中はスープであろう。炉上のフードにも，側面の壁にも錫製スープ皿が並び，亦木で出来ているスプーン掛けが吊り下げられている。彼女はきりっとした顔付で忙がしげに働いている。

Fig. 100 女子料理人
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, **143 v.**)

143 v.　女子料理人　**Fig. 100**

1663年，Anna Maria Huffnäglin は料理人として当館に勤務することになった。そして1664年5月4日，もう一度，より高令な人々の為めに奉仕したいとの自身の希望により勤務を解かれることとなった。彼女は清潔で明るい料理人で，兄弟達に親切であった。亦独身者であった。

髪の乱れを防止する為めの非常に大きなヘアバンドをし，リボンを首の周りにきちっと結び〔フォア・イン・ハンド（fourin hand），普通の結び方のネクタイ〕垂れ下げている。平炉かまど上では薪置き台の両側に交互に置いた薪がよく燃え拡がって傍の壺を熱している。壺は煮こぼれを防ぐ為め少し蓋をずらしている。亦自在鉤に釣された丸底銅製の大鍋の中の汁も煮え立っている。彼女は5匹のかますのような魚を足付き金網に並べ火にかけるところである。壁の棚には錫皿や陶製皿，長柄のフライパン，真鍮製粉砕器，大型銅製水差用ジョッキが見られる。亦スプーンやひしゃくを掛けた柱状板と既に130 v.（本稿，p. 14）に見えた小さい木製箱もある。この小箱は調理用の塩入れである。

144.　コンパス作り

コンパス（両脚器）作りの Hanß Rühl は1663年入所。そして1668年3月11日，78歳で死去。590 番目の兄弟である。

彼は今，ブッチエンガラスの入った窓下でコンパスを粗い目のヤスリで削っている。キュロットをかぶり，白いカラーをし，飾りリボンで首廻りを結んでいる。石積壁には各種のヤスリと外径測定用のパスが掛けてある。戸外には城が見え，野原には車輪架台にのっている真鍮製らしい大砲が置かれている。その傍に大きなつばのフェルト帽子をかぶり，長剣を右肩からベルトで斜に下げ，左手に点火棒を持ち気取ったスタイルで立っている市民防衛砲兵隊員としての若い頃の彼の姿が異時同図で描かれている。

144 v. 指貫き作り

指貫き作り職人の Nicolaus Zeittenberger は1663年 4 月 4 日，67歳の時入所。1667年12月24日死去した。591番目の兄弟である。

カンヌキ型鍵をつけた扉のある仕事部屋の中央に，上端に鉄のタガを締めた木台を据えて，指貫用の特殊な金床で，針尻を受けるくぼみをハンマーで叩き出しているところである。窓には鉄枠が入っているがガラスはない。

145. 細密画（12使徒 Paulus の図）

この細密画は，崖の道辺，大きな樹木の下，パウロが左手に書物，右手に立派な飾のある刀柄の大きな剣を抜身にしてしっかり握り，地面に突き立てて立っている図である。禿げ上がった広い額い，堂々としたあごひげ，鋭い眼。青い僧衣の上に赤色の長いガウンをまとっている。そしてその崖の下を馬で馳せ抜けようとしている人物と，その傍，投げ出されたような恰好の人物が描かれている。2 人の遥か上空にはキリストが強裂な光芒を投げかけている。

パウロはローマ市民権を持ったユダヤ人で，紀元後35年頃，ローマ長老会議の命令に従ってダマスカスのキリスト教徒迫害に赴いた。その途中馬から投げ落され，目もくらむような光によって盲目になった。その時彼はキリストの声を聞き，直ちに回心しペテロと並ぶ12使徒の 1 人となった。そして地中海各地を歩き福音を説いて廻った。紀元後67年 6 月29日死去した。細密画はこのパウロの回心を示すものである。

146. 理事者紋章

Paulus Harsdörffer殿はカルトィザー修道院の中で，1663年メンデル家12人兄弟館の理事者に任命された。そして1666年までその任にあたった。彼は1605年 6 月 8 日の生れで，1666年 8 月 3 日死去された。

肖像画はなく，エンデル村の Paulus Harsdörff の紋章が描かれているのみで

ある。彼の夫人，故 Barbara Löffelholz（1612～1658）の紋章も一緒に描かれている。夫人は Colberg の出身である。

147.　女子料理人

Margaretha Dörschin は1664年５月５日，54歳の時，当館の新しい料理人として勤務することになった。彼女は23年間に亘って勤めてくれ，1687年１月23日，77歳で死去した。

大きなヘヤーバンドをつけ，首にリボンをフォア・イン・ハンド（普通のネクタイ結び）にしている。平炉かまどの上では鉄製薪台のまわりに燃えあがる火を囲んで蓋付壺が置いてある。彼女は左手に下げている壺のスープの味加減を木製長柄のスプーンで味見している。その傍，かまどの上には既出の調味用塩入れ小箱がある。周辺の棚や床，フードの周りには錫製皿，たらいのように深い容器，銅製の大きな蓋つき水差しや陶製片手付壺がある。

147 v.　組み紐作り

1665年７月15日，組み紐作り（モール作り）の Jacob Hemmerich が入所。72歳であった。非常に気性の激しい人物で，1671年８月９日，78歳で死去した。592番目の兄弟である。

彼は館の制服に前掛けをかけ，キュロットを被り，三脚椅子に腰を下ろし，糸車から組み紐用のモール糸を球状に巻きとっている。

モール（mole）は毛虫の意味で，針金，綿糸，金・銀糸を芯糸として，これに絹糸などをからみつけた線状或いはヒョウタン形をした紐である。シェニール糸とも言う。軍服の肩章や衿章，礼服の付属品，装飾品に用いられた。

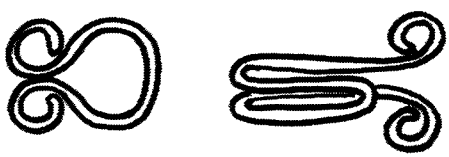
モール織と言うものがあるが，16世紀インドのムガール帝国で産したドンスに似せた紋織物である。ムガール（Mogul）がなまってモールとなったという。亦絹糸と金・銀糸を織り合わせたリボン状の織物もモール織と言っている。

148. 留め金作り

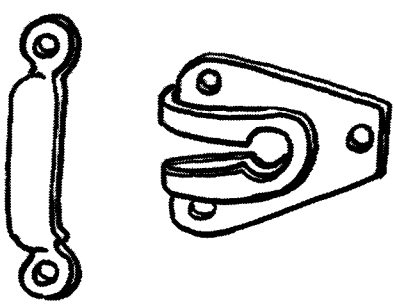
留め金作りの Wolf Steinhauser は1665年 7 月20日，53歳の時入所。そして1677年 8 月，67歳で死去した。593番目の兄弟である。

木台上に据えられている四角形の金敷に向かって，三脚椅子に腰を下ろした彼が，短い柄の槌頭の大きい小形のハンマーで留め金を製作中である。材料は図から真鍮の針金のようにも見えるがよく分らない。もし針金であるとすれば引掛ける鉤状の部分 (hook) と引掛けられるループ状の部分 (eye) からなるフック・アンド・アイ (hook and eye)，所謂鉤ホックであるが，針金でなく真鍮板であれば板製の hook と細長い板 bar で出来た鉤からなるフック・アンド・バー (hook and bar) である。

留め金はスカートのわき留め，背明きの留め用など衣服の開閉の為めに使われるもので，真鍮や鉄の金属製で表面を色焼付したり鍍金している。



hook & eye



hook & bar

Fig. 101 フックアンドアイとフックアンドバー

148 v.　英国生地染屋

英国生地の染屋の Johannes Lemming は1665年８月12日，68歳の時入所。そして1671年・聖ヤコビの祭日の日の７月25日死去した。594番目の兄弟である。

煉瓦で組んだ大きな円形炉に金属製の鍋が据えてある。その上にまたがってがっしりした木製の枠柱が組んであり，柱間に幅広い木製の滑車が備えられている。今煮えている染料鍋から染められた生地を滑車を廻して色の具合を見ながら何度でも生地を万辺なく染料鍋に浸しているところである。戸外の乾燥台には赤く染め上げた布が乾してある。彼は腕までの白シャツを着て半ズボン姿である。長い前掛を締め，足にはトリッペ（Trippe）〔M-Ⅰ，**55**，（商学305号，**Fig. 60**, p. 185）; M-Ⅰ，106V.（商学321号，**Fig. 110**，p. 110）参照〕をはいている。

149.　酒場の亭主

酒場の経営者の Georg Bemsel は1666年３月22日，57歳の時入所。1666年５月28日に死去した。595 番目の兄弟である。

彼は初めニュルベルク市郊外の Gelben Löwen（市の中心から南東10km の郊外，Altenfurt の中）で営業していたが，その後ニュルンベルク城内の Silbern Glöcklein 横丁（市中ゼバルダス教会の北側で市役所の西側にある）に移って営業していた。ニュルンベルク特有の赤味がかった砂岩で積み上げた立派な店舗の階段を下って地下倉庫に酒を注ぎに来た彼の姿は，左手に錫製の大ジョッキを持ち，右手に鍵束を下げている。そして肩まで覆っているラフ飾り衿をつけ，館の制服をきちっと着ている。酒場の経営者らしいきりっとした好男子である。今倉庫の扉を開けようとしている。

149 v.　隊商護衛騎手

隊商の護衛団騎手でもあり，亦 Golden Enten（市中Kormmarkt のそば，国

立ゲルマン博物館の西側）の酒場の経営者でもある Jacob Alter は1666年 6 月18日，7 4歳の時入所。1669年 7 月11日死去した。596 番目の兄弟である。

大きな白いカラー衿で手首までのシャツを着け，その上に腕なしで膝までの長さの上着を着ている。ボタンはなく紐でくくってある。小銭や書類でも入れておくのであろう，皮製のタッシェをバンドにつけている。亦図には明らかでないが護身用の長剣を肩に斜めに掛けたバンドで吊しているようだ。口の広い膝まで覆った大きな長靴カバリア・ブーツ（Cavalierboots）をはき足ごしらえは万全である。左手に大きなつばのフェルト帽を持ち，右手で馬の手綱をしっかりと握って険しい山道を歩いている。

150 v. 細密画，ペリシテ人とイスラエルの戦い

この図の額縁に Paralip. Ⅰ, Cap. 21と記してある。歴代史略の第 1 巻21章に基づく図であることを示すものである。

暦代史はヘブラ原典では“デイプレー・ハッヤーシーム”「日々の出来事」，亦ギリシャ語典では“パラレイポメノーン”「取り残されたことがら」を意味し，ユダ王国の歴史書，列王記の補足書である。原典は 1 巻であったがギリシャ訳から 2 巻に分けられた。紀元前300年頃の編集といわれている。第 1 巻の10章から29章まではダビデ治世の時代について記してある。

エジプト人に追い払われたペリシテ人（フィリステア人）は，B．C．12世紀地中海沿岸のヨッパからガザにいたる長さ80km，幅 4 km のせまい平地に浸入し定住した民族で，一方イスラエル人はエジプト王メルエンプタハに征服された一部族で，B．C．13世紀中頃エジプトを脱出してパレスティナに浸入してきた民族であった。イスラエルに民族統一王権が成立したのはB．C．1040年頃でサウルによってである。

ペリシテ，イスラエルの隣人は互いに領土をめぐって 8 世紀の長きにわたって争い続けた。棍棒や石斧で闘うイスラエルの未開な状態に対して，ペリシテ

人は既に鉄の武器を作ることを知っていた。ペリシテ人の強力な軍隊はイスラエル人にとって大変な脅威で，幾度となく敗北の憂き目に遭った。サウルがペリシテ人の戦いで戦死した後，かつてペリシテの巨人ゴリアテを投石器で倒したダビデが第２代目の王となり，ペリシテ人をヨルダン河に追いつめ撃破して圧倒的な勝利をおさめペリシテ人を完全に降服せしめた。そしてイスラエル王国は安定したのである。その時の有様をこの図は示しているのである。

151.　古靴修理屋，聖歌隊先唱者

古靴修理屋であり亦30年にわたって教会の聖歌隊先唱者を務めた Georg Redig は，当館の理事者で市参事会員のハーラースタインの Johann Sigmundt Haller 殿からの推挙で1667年６月６日，60歳の時入所してきた。そして1677年１月12日死去。彼は飲みすぎ酔どれて２度も豚箱に入れられたことがあった。

大きく開かれている窓に向って，ふんばり皮で両膝の上に固定した靴底を縫っている。両掌にはバンド状の手甲がしてある。足許の水をはったたらい桶にはこれから修理する靴を柔らかくするために浸してある。亦砥石も浸してある。仕事台には半月包丁，鎌形キリ，木型を入れた靴が見られ，壁の桟にはジャックブーツと短靴が掛けてある。

窓から石を敷きつめた広場が見られ，亦広場に面して両側に尖塔と鍾楼を控え，マリア像を頂上に立てた教会堂があるのが分かる。黒づくめの服装で先唱者の彼が教会堂の扉を押して入ってゆく姿が異時同図で描かれている。

教会での典礼聖歌で，こみ入った部分を歌う為に選ばれた担当者が先唱者（Vorsinger; Precentor）と呼ばれており，典礼聖歌（Chant）は旋律をともなう歌で典礼儀式の一部を形成するもで，一般の賛美歌とは違うものである。

この文書の中に出てきたハーラースタインの Johann Sigmundt Haller 殿はニュルンベルク市参事会員で1666年から1670年に亙って当メンデル家12人兄弟館の理事者を務められた。彼は1606年６月23日の生れで，1670年10月31日に死

去された。(この図中には彼の肖像画も紋章も掲載されていない)。

151 v. 飾り羽根作り **Fig. 102**

当初飾り羽根作りに従事していたが，1628年以後は裁判所の使丁を30年以上にも亙って勤務した Johann Wurmbeinは1667年 6 月 6 日，73歳の時入所してきた。そして1671年 4 月 6 日死去した。598番目の兄弟である。

仕事机の上には種々の色に染めた羽根が並べてある。櫛で逆毛をたてたり，羽軸をガラス片でこすって削り軟らかくして丸めたりして房状に加工する。彼が今手にしている羽根がそうである。更にこれらの房状にした羽根を縫い合わせたり，継ぎ合わせたりして机上にあるようなふんわりした大きな塊状の形に仕上げる。そして山の平たいつば広のフェルト帽にぐるりと縁取って側面に垂れ下がるように飾りつけたり，騎士の兜の頂部に華麗にたなびかせたり，帽子

Fig. 102 飾り羽根作り
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, **151 v.**)

全体を覆って飾ったりした。野鳥，水鳥の区別なく種々の鳥が使用されたが，鶏，キジ，山鳥，白鳥，こう鶴，孔雀，駝鳥，アオサギ，オウム……が良く使用された。羽根のみならず尾，胸，腰，背などの羽毛を目的に合わせて用いる。房状にしないで尾の長い美しい羽根や小さい羽根を単独に或いは数本程度束ねて帽子のリボンに挿して飾ったり，亦帽子にではなく直接髪に挿す髪飾りにも用いられた。人々は頭部を豪華に飾り立てている羽根を指して「頭が飛んで行かないよう気をつけなさいよ」と，はやしたてた。更には羽根で作った扇も婦人の装飾品として喜ばれた。羽根がこのように用いられるようになったのは16世紀後半からで，17世紀には大流行し飾り羽根作りは重要な手工業となった。その為め鳥の捕獲禁止運動が起こるほどであった。しかし18世紀を過ぎると，羽根飾りのブームは過ぎそれほど目立たなくなった。

152.　英国生地染屋

英国生地の染屋の Michael Harst は1667年７月15日入所。そして同年11月19日死去した。599番目の兄弟である。

本稿148 v. 図と同じである。ただ左右が逆で生地を赤に染めているのが異なるだけである。

13世紀からイギリスの下層職人により粗織（アラオリ）された羊毛が商人の手を経て大量に輸入された。この粗布を熟練した職人が染色し毛羽立て剪毛して立派な生地に仕上げ，諸国に高価に販売していたのである。しかし後日イギリスは羊毛や粗布をそのまゝで輸出することを禁止し，自らの手で立派な製品にして売り出すにいたった。

152 v.　パン屋

パン屋の Johann Wurth Gruen Thiern は1667年12月２日，54歳の時入所。そして1669年７月25日，水腫によって死去した。600番目の兄弟である。

石積みパン焼炉に大きなライ麦丸パン塊の生地を木製のシャベルで挿入している。傍の台には沢山の丸パン塊生地が並べてある。早朝のパン焼とみえ炉の上部に据えてある燈火皿にほのかに火が燃え上がっている。広い幅の白カラー衿のあるガウンのように長い服の腕をまくり上げて忙がしげに働いている。トリッペをはいているので石敷の床でも冷たくないようである。

153. 留め金作り

留め金作りの Christoff Krauttsbergen は1668年 1 月17日，64歳の時入所。1671年 5 月30日死去した。601番目の兄弟である。

本稿148 の図と全く同一の図である。金敷上に置いてあるのは薄い鉄板のようである。彼が今小槌で叩いているのはフック・アンド・バー形式の留金制作の為めの型打ち抜き作業であろう。

153 v. 粉屋兼小麦粉商人

製粉屋であり小麦粉商人でもある Johann Zistler は1668年 3 月18日，62歳の時入所。1675年 4 月 3 日死去した。602番目の兄弟。

彼はザウェルンホッフの息子の所領に住んでいた粉屋で，今右手に計量升を持ち，計量し了えて一杯にした小麦粉袋に左ひじをかけてほっと一息ついたところである。床上には小麦粉を入れた小袋が並べてある。

衿元を美しいラフで飾り，肩ぐり，袖も袖口も服の縁も緑の色糸でかがり，細かい飾りボタンを沢山つけたぴっちりした粋な上着を着ている。腕には大きなスラッシュが入り，下着のシャツが見えるようになっている。いかにも裕福な商人のいでたちである。スラッシュ（切り込み装飾）は16世紀に流行したスタイルである。

154.　馭者

Ottingen 近在の Alerheim 生れの馭者 Georg Schieling は1668年12月３日，70歳の時入所。そして1673年３月23日死去した。頑固で短気な人物で，大酒飲みであった。603番目の兄弟。

ラフ飾り衿をつけ，上から膝まで続いている服の腰廻りを紐で締め，同じ様にズボンの膝下のところをリボンで締めている。そして長袖前あきの短コートを羽織っている。右手に鞭，左手に縁を毛皮でかがって飾りにしたキャップを持って立っている。彼の背後に見られる草原を４頭立ての大型馬車が駆けてゆく。一番うしろの馬にまたがり馭しているのが彼で，馬車の中には２人ずつ向き合って座している客が見られる。

154 v.　刀剣鍛冶

刀剣作りの Erhard Heumann は1669年８月５日，71歳の時入所。そして同年11月１日に死去した。604番目の兄弟である。

彼は縁に細かい飾りのある広幅のカラー衿をし，首回りを房のついた紐で締めている。上腕部に大きくスラッシュの入った長袖上着を着用，革の前掛けをして作業机に向って長身のサーベルにヤスリを掛けている。机上には万力廻しの金具，トンカチ，ヤスリ，ホークそして沢山のヤスリを挿し込んである赤い筒とその蓋が見られる。３本の豪華なサーベルを交差させ，その交点上に冠状の飾り板をつけた彼のギルドの紋章様のものが作業室の板壁に掲げてある。

155.　真鍮地金作り　**Fig. 103**

銅と錫から真鍮合金を溶解する職人の Georg Heller は1669年９月15日，65歳の時入所。そして1678年１月29日死去した。彼は当館の風紀委員を務めた。605番目の兄弟である。

彼の服装は154 v. と全く同じである。この服装は館の新しい制服なのかも

Fig. 103 真鍮地金作り
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, 155)

知れない。

石積の壁で囲まれ，床がたたきになっている仕事部屋。その一隅に穴を掘って真鍮溶解炉が埋められていてさかんにかんに焔を上げ，真赤に溶けている。彼は背の高さほどもある大きなヤットコ状の掴み金具を持ち，右手には円板状の銅塊を持っている。溶解炉に更にこの銅塊を投げ入れようとしているところである。

155 v. 靴屋

靴屋の Georg Dürnhausser は1669年，73歳の時入所。そして1670年11月 4 日死去した。606番目の兄弟である。

彼の服装も亦154 v. 155と同一である。半月包丁を持ち，ひろげた革をこれから裁断するところである。ひろげた革を動かないようにしっかりと押える為

の重石であろうか，大きなハンマーが載せてある。

156.　大工

大工の Johann Krauß は1669年11月27日，75歳の時入所。1677年12月24日死去した。607番目の兄弟である。

今馬に載せた角材の溝穴をひようたん形の木槌をふり上げてノミで堀り出している。石積みの一階の上に木骨構造の木組を載せた建築中の家が見える。

156 v.　白鞣し工　**Fig. 104**

白鞣し工で亦街区市民警備隊長である Barthel Graff は1670年11月21日，63歳の時入所。そして1682年1月10日，74歳で死去した。608番目の兄弟である。

石積み石敷きの仕事部屋の壁に沿って置いてある太い材木の桟に，殆んど鞣

Fig. 104　白鞣し工
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **156 v.**)

し了えた毛皮が掛けてある。その桟の前に厚い台板に柱を立て，柱の頂上に直径が30cm ほどの金属球を取りつけた道具が置てある。

彼は丸首衿の白いシャツの腕をまくり上げ，短ズボンを膝頭のところでくくった身なりで，左手に鞣し了えた毛皮の頭の部分を，右手で尻っぽを握って革の内側を金属球に当てて左右にこすりつけながら革をひき延ばして整えている。同時に艶もつけているようである。力をこめてこすりつけているので，この道具がぐらつかないよう左足を台板に載せて押さえつけている。戸外には乾し竿が延々と立てられていて何枚も鞣し了えて，この最後の艶出し兼延ばし作業を控えた革が吊るされている。床には毛ぞり刀が見られる。

158. 理事者

Andreas Georg Paumgartner は1670年から1677年までの間「メンデル家12人兄弟館」の理事者を務められた。彼はニュルンベルク市の市参事会員であり，1613年10月24日生れで1686年 5 月18日に逝去された。当館の理事職は1677年に解任された。

理事者は大きな豪華なラフ飾り衿をし，肩から両前にかけて大きくテンの毛皮のついたマントを羽織り，そして大きな金メダルの下っている太い金鎖をしている。豊かな髪のきりっとした顔付の人物である。この肖像画の上部の額には，Paumgartner 家の紋章と彼の 2 人の夫人，Paumgartner 出身のKatharine (1638年没) と Enderndorf の Harsdorf 出身の Sabine (1607年生れ，1675年没) の紋章が描かれている。そして更にその上部に最後の審判の図がトランペットを吹いている 2 人のエンジェルに支えられている。亦彼の肖像画の左右には 2 人の人物が描かれている。向って左側はマントを着て杖をつき多少伏し目勝ちの老人の図で，右側はU字形に開いた衿まわりからウエストにかけてルビーや翡翠の宝石を点々とちりばめたコートを着，首輪をかけたブロンドの婦人像である。婦人の頭部には真珠を連ねた紐が額から後頭部にかけて載せてある。こ

れは当時流行の飾りである。左手には赤い革袋を握り，右手にこの袋から取り出したのであろう銀貨を１枚持って差し出している。彼女の足許には１羽の親白鳥が自分のくちばしで胸をつゝいて血を流している。その周りには子の白鳥が群がっている。何を象徴する図であろうか？。

158 v.　箴言と詩篇

箴言　３章　27節

恩恵を施す力があなたにある時には

あなたが施すべきその恩恵をだれにも拒むな

箴言　19章　17節

貧しい人々に寛大である者は主に貸すのみである。主は彼に完全に報いる

箴言　21章　13節

もし人が自分でどうすることもできない人の叫びにその耳を閉ざすならば

彼自身が助けを求めて叫んでも聞かれなくなる。

（松浦大訳Ｒ．Ｎ．ワイブレイ，ケンブリッジ旧約聖書注解15., 新教出版社，1983．２）

詩篇　41篇

困っている者をかえりみる人はさいわいである。主は，そのような人を悩みの時救われるであろう

主は，彼を守って活力を与え

この地にあって安全なものとされる

主は決して彼を敵の欲望のまゝにまかせられない

主は彼をその病の床で看護される

主は彼が病む時，その寝床を返される。

（村上達夫訳　Ｒ．Ｎ．ワイブレイ，ケンブリッジ旧約聖書注解13，新教出版社，1984．８８）

159.

主を信ずることの慶び

159 v. 真鍮地金作り

真鍮地金の熔解者の Johann Dich Bierwirth は1671年 5 月10日，68歳の時入所。1675年 7 月29日死去。609番目の兄弟である。気位の高い慎重な人物であった。石積みの作業室，石敷の床の一隅には，下に備えてある熔解炉の円形の口が開いている。そして銅と錫がはげしく熔け合っているとみえ，勢いよくガスが噴き上げている。

彼は長い前掛けをかけて155. **Fig. 103**（本稿 p. 38）と同様の服装で熔解口の傍に鋭い眼付をして立っている。合金材料の皿板状の銅塊を左手に持ち，右手には長いヤットコ状の掴み金具を持っている。

160. 銃床作り **Fig. 105**

銃床作りの Stephan Wagner は1671年 6 月16日，35歳の時入所。そして1680年11月 1 日，43歳で死去した。彼は猟師の出で，銃床製作組合の 1 員である。610番目の兄弟。

大きな白いカラーのシャツの上に，小さいボタンをびっしりと並べた長袖の上着をつけている。袖口は大きく折り返してカバー状になって，いかにもすっきりしたスタイルである。上腕部から袖口まで大きなスラッシュが入り，下着の白いシャツがアクセントになっている。ズボンは膝までで，リボンで結んでいる。靴は左右各々外側の部分に飾りホールのあるしゃれたものである。

今彼は作業台の上に置いた 2 丁の完成銃を柔かい布でみがいている。彼の手になる銃床木部が一段と銃を美しくさせているようだ。作業台の縁の部分に鉄板がはりつけてあるがこれは細かい作業用の当て板であろう。撃鉄の部品らしい金具が見られるところを見ると，彼は銃の組立てもすると思える。

Fig. 105　銃床作り
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **160**)

160 v.　パン屋

Gostenhof から来たパン屋の Eberhardt Roming は1671年，72歳の時入所して来た。そして1689年１月25日，89歳で死去。611番目の兄弟。

石積み部屋の大きく開かれた窓に備えられた陳列台に，彼は今焼き上がったふくふくした一連の白パンを並べている。陳列台には細長い黒パンや表面がこんがりと焼かれている中形のパンが積ねてある。亦石柱の環につき挿した棒にはプレッツェルがいくつもぶら下げてある。

彼の服装も前記の銃床作りと同様であるが，細かいラフ飾り袖をふんわりとひろげている点が異なる。

161. 鈴作り

鈴作りの Erhardt Dechelmäyer は1611年 8 月，86歳の時入所。1672年11月26日早朝，自分のベッドで死去しているのが発見された。612番目の兄弟である。彼は亦宿屋の主人でもあった。

彼は広い白布のカラーをし，長袖で沢山ボタンのある制服を着用し，前掛けをして木台を前に腰を下ろして鈴用の半球作りに励んでいる。木台上に鈴球用の大小種々な半球を彫り込んだ部厚い雌型鉄板が置かれている。その上に真鍮薄円板を載せ，先端部が半球形になっている雄型用鉄棒を当ててハンマーで叩いて半球を作るのである。出来た半球が木台上にならべられてるのが見られる。中に鈴芯の小塊を入れ，この半球を合わせ鈴球が完成する。完成した鈴が床上のバスケットに一杯入れてある。壁には中央部に銀色にメッキした鈴球を沢山つけ，縁を黄・黒・白・水色の四色の糸でかがった美麗な幅の太い舞踏用のバンドが吊るしてある。

161 v. 筆耕

書記のような仕事に従事していた Johann Christoph Pilgram は，1672年12月24日，54歳の時入所。61歳の時（1679年）結核によって月曜日の夜死去した。もの静かな温和な人物であった。613番目の兄弟である。

十字枠の入った大きな窓の傍にどっしりした立派な大きな机が置かれている。彼は机上の斜面書写台上でペンを走らせている。どうやら手紙のようである。彼が座している椅子は曲線模様に仕上げた背もたれ板のついた四脚のものである。窓の十字枠の各々にブッチェンガラスが入っていて，別々に開くように出来ている。一つの枠では中央の 1 部分が更に仕切られていて平らなガラスが入れられ，外が見通せるようになっている。平らなガラス板は今迄の図には出てこなかった。

162.　パン屋

パン屋の Johan Haussel は1673年４月１日，63歳の時入所。1677年10月２日，67歳で死去した。614番目の兄弟である。

彼はパン焼き炉の前に立って焼きたてのパンを手にしている。眼前の台には大きなパン塊３個と６ケずつ続いている白い食パンが３本置いてある。通風孔のある大きく口を開けたパン焼き炉の傍に木製のパン焼き用シャベルが立てかけてある。

162 v.　馭者

Jakob Blumert の処の馭者をしていた Johann Schmidt は1675年５月10日入所。そして1680年５月23日死去。615番目の兄弟。

大きく広がった白布のカラー衿，ボタンの沢山ついた膝までの長袖コート，袖口は大きくまくってある。その袖口から手首をきっちりと締めた下着が見える。しゃれた靴を履いて彼は今廊下に立っている。右手に長い革手袋と広つばのフエルト帽を掴み，左手に鞭を持っている。通路から見える戸外には大きな欅が立ち，遥か遠方まで道が続いている。

163.　麻布織職人

麻布織工の Johan Seitz は1675年８月13日，66歳の時入所。1696年７月３日死去した。616番目の兄弟である。

広い白布のカラー衿をし，長袖のシャツ姿で腕まくりをしている。胸当のある短ズボンで，スリッパの様なものを履き，織機に向っている。スリッパの様な履き物はこの図の中では初めてである。

織りあげる布により織工も羊毛織工とか，バルカント織工…種々な専門の織工がいるが，それらの中で麻布織工は一番賃金が安く，一番社会的地位が低く軽蔑されていた。

大麻を布に使用するようになったのは15世紀からで，それまでは綱具などや粗末な布に用いる程度であった。この粗末な布は主として毛織物を買うことが出来ない貧乏な庶民用であった。

163 v. パン屋

Rosenbad のパン屋の Vllrich Laurentz は1676年 9 月28日，70歳の時入所。1679年11月 7 日死去。617番目の兄弟である。

本稿162の図と殆んど同一である。

164. レープクーヘン菓子職人 **Fig. 106**

Lierdt でのレープクーヘン作りの Dionysius Christoph は1677年 1 月24日，51歳の時入所。彼はもの静かで信心深い人物であった。1 年半ほど関節の病を

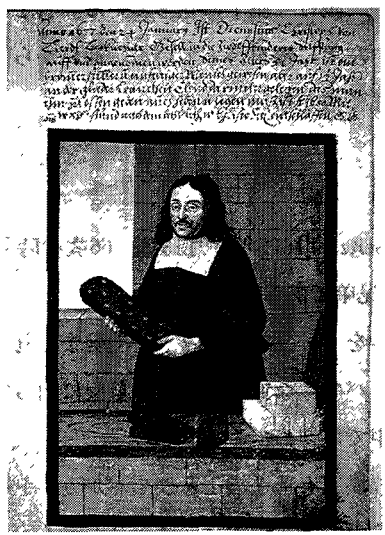


Fig. 106 レープクーヘン菓子職人
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, **164**)

患い，体がみじめに曲がってしまい寝込んでしまった。そして介抱される身となったが，1680年の夜中死去した。
618番目の兄弟である。

館の制服の半コートを着て，彼が今焼き上げたクルミ入りベェステクテン（M-Ⅱ，99. 商学337号，p. 254）のレープクーヘンをかかえて，窓辺の陳列台に運んでいるところである。このクーヘンは3分割出来るように割れ目が入れてある。陳列台には分割したクーヘンと，このクーヘンを幾枚か包み，十文字に結んだパックが重ねて置いてある。

167.　理事者

枢密顧問官であるわたくし，Kirchensittenbach の Georg Christoph Volckamer は1677年5月9日，カルトイザー街にあるメンデル家12人兄弟館の理事者に任ぜられた。そして1679年までその任務を果した。（1610年4月15日の生まれで，1679年3月10日逝去された。）

本稿158の図と同様の油彩肖像画で，その上部に彼・フォルクマイヤー家の紋章と，夫人 Marie Magdalena，旧姓 Enderndorf の Harsdorf 家の紋章が描かれている。夫人は1624年生まれで1686年の逝去である。

167 v.　箴言　28章　27節

貧しい者らに施す者は決して欠乏することがないが，見て見ぬふりをする者はのろいしか得ない

168.　メモ

168 v. 真鍮針金引き

真鍮針金引き職人の Johann Stengel は1677年 9 月 1 日，63歳の時入所した。その後急に世襲の農地が手に入ることになり，そのせいで急に高慢な態度になった。亦性悪女にうつつを抜かし，ひそかに便所から館を脱走して鎖につながれる処罰を受ける始末であった。そして1681年兄弟館から追放されることになったのである。619 番目の兄弟であった。

広い白布カラー衿で，大きくスラッシュの入った長袖の制服を着用している。ものうげな顔をして作業台上の真鍮線コイルを廻して所定の太さの針金を引いている。

169. 銅容器鍛冶職人

銅容器作りの Jacob Herburger Statt は1677年11月 2 日，62歳の時入所。1693年 7 月 2 日，夜 9 時から10時の間に死去。620番目の兄弟。

彼は自作の大きな銅容器製品を作業台上に並べている。優美な安定したカーブに制作された蓋付き銅板製大型ジョッキ 2 ケと取手のある内面に錫メッキを施した壺 1 ケが見られる。恐らくジョッキの内部も同様にメッキされていることだろう。製品の外面はいずれも燻し銅の落着いた色合で，非常に単純であるが上品な線描き模様が帯状に施されている。

169 v. 学校長 **Fig. 107**

Burgfarrnbach の学校長の Johann Zirner は1678年 1 月15日，77歳の時入所した。彼は Wurttenberger 地方の Calb の生れで，多読の勉強家であり温和な人物であった。しかし死去する 1 年前頃にはすっかり衰えてしまい，そのような面影は消え失せてしまった。1685年 5 月27日日曜日，晩鐘が鳴り終えると間もなく，静かにその生涯を閉じた。84歳の時である。館の風紀委員を最後まで務めた。621番目の兄弟である。

彼は今３人の子供に唱歌の授業を行っているところである。高い背の書籍台の卓上に部厚い大きな楽譜帳が開いて載せてある。譜面のある箇所を左手で差しながら，右手に持った指揮棒で一所懸命に教えている。３人の子供達も各自小型の楽譜帳を持ち，大きく口を開け，楽譜を或いは指揮者の方を見上げたりして歌っている。

彼は広い白カラー衿の長袖のコートを着ている。子供達はラフ飾り衿をつけびっちとした長い上着，ズボンは膝までで靴下をはききちんとした身成りをしている。

中世の時代は一般に文盲の時代あったといわれているが，一概にそうだときめつけることは出来ない。殆んどすべての教会において初等学校が開かれ読み・書き・算数が教えられていたと考えられる。亦グラマー・スクール，徒弟になる前の実業教育施設など初級以上の学校の数も可成り多かった。特に13世

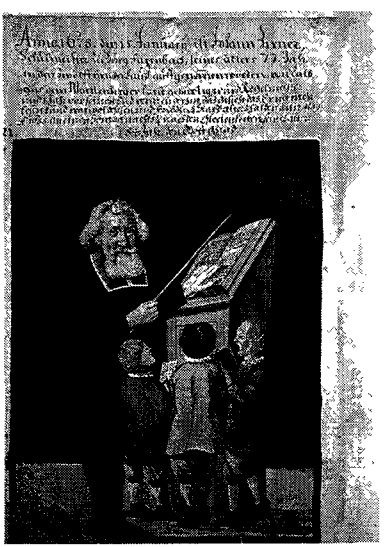


Fig. 107　学校長
(Amb. 317 b. 2°,　Bd Ⅱ-2, **169 v.**)

紀以降都市の自由人には読み書きそろばんを解する人の数は多かった。

170. 兵長 **Fig. 108**

古参兵の Hanns Stegner は1678年10月14日，55歳の時入所。1688年10月24日死去した。彼は Harsdorffer 傭兵隊長摩下の兵長（伍長勤務上等兵）であった。622番目の兄弟である。Haus Jobst Harsdorffer 殿は Endern 村の出身者で，1643年に生れ1706年の没で，1697年ニュルンベルク市の傭兵守備隊長になった。

Hanns Stegner は黄色の華美な上着とズボンを着用している。長袖には大きなスッラッシュがあり，ゆったりした下着がのぞいている。亦袖口にはしゃれた茶褐色の袖カラーがついている。上着の側面にはえぐったように黒色の布がついていて非常に目立つ服装である。足には踵の高い，締めつけ用の細身の皮バンドのついた靴を履き，ズボンの上に膝上，太ももまで届く革製の脚半様の

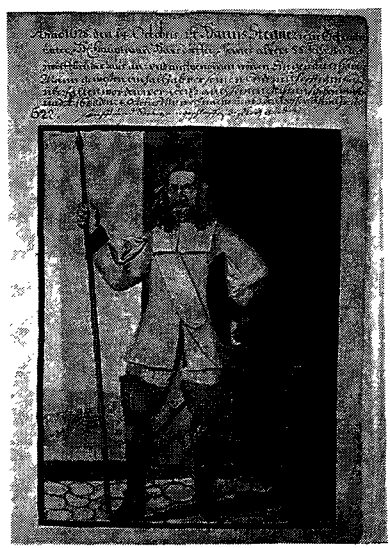


Fig. 108 兵長
(Amb. 317 b. 2°, Bd II-2, 170)

ものをつけている。そして膝頭の下部をきりっと紐で締めている。右肩から左脇下に巾広の上着と同色の黄色バンドを掛け，それに長剣を吊している。右手に槍を持ち城門の前面で立哨勤務に服している。酒やけしたような赤鼻，けいけいとした眼つき，如何にも古参の兵士だ。

172.　理事者

Kressenstein の Jobst Christoph Kreß は1679年５月９日，カルトイザー街のメンデル家12人兄弟館の理事者に任ぜられた。そして1687年解任されるまでその職にあった。彼は1623年９月５日の生まれで，1694年９月23日に逝去された。

羊皮紙に油彩で描かれている彼の肖像画は大きな２段のラフ飾り衿をつけ，肩から前衿にかけて豪華なミンクの毛皮を幅広くつけたゆったりしたガウンを羽織つている。ガウンの下には太い金鎖が２本ちらっとのぞいている。薄くなっているが金髪で優雅な顔付をしている。

肖像の両側には天秤と剣を持ち，眼かくしをつけた正義の女神と，コンパスを手にした美と芸術の女神が立っている。図の上部には Kressen 家と彼の夫人 Anna Sofie, 旧姓 Haimendorf の Fürer（1636年生れ，1707年逝去）の紋章が天使に囲まれて描かれている。

174.　指物職人　**Fig. 109**

指物職人の Hanss Kuhn は1679年11月12日，75歳の時入所。そして1680年５月17日の水曜日午後２時に15分前，76歳で神に召された。温和な快活な人物であった。623番目の兄弟。

彼は今戸棚の上部に飾るための彫り物をノミで刻んでいる。可成り大型の彫刻物で，大きく口を開いた獣面のようである。

細工中この彫刻面が動かないように コ の字型の押へ万力で作業台に固定してある。台上には金槌と物指しが見える。背後の壁の棧には各種のノミ，ドリ

Fig. 109 指物職人
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, **174**)

ル，直角定規，コンパスが整然と掛けてある。亦棚にはカンナ，金槌が置かれている。

174 v. 給士

婚礼の席での給士の Johann Häubelein は1680年 1 月22日，65歳の時入所。1682年 1 月 4 日，神の御召しを受けた。穏かな思いやりのある人物であった。624番目の兄弟である。

食料庫へ入る門であろう，石組のがっしりしたアーチの前に立っている。右手には美事な細工がなされているガラス製ワイングラスを持ち，左手には錫製蓋付ジョッキを下げている。ワイングラスには半分程黄金色に輝いたワインが入っている。大きなリネンの衿飾りをし，腕に大きくスラッシュの入った長袖

上着を着ている。袖口は大きく折り返されていて風格のあるスタイルをしている。

175.　金属容器の鋳物師

錫製容器や金属製ポットの鋳物師の Sebalt Reiter は1680年５月24日，61歳の時入所。そして1697年７月４日，78歳の折死去。625番目の兄弟である。

作業台上には彼が鋳込んだ錫製ポットが削り仕上げされ，完成品になって置いてある。彼はその前に満足そうな顔をして立っている。背後に木製の大型車輪が見られるが，これは既述（M-Ⅰ，**29 v.** 商学302号，p. 200；M-Ⅰ，**49.** 商学305号，p. 180）したように，助手に回転させて鋳上ったポットを削って仕上げる為めの旋盤のはずみ車である。台上にはコンパスと外径用パスが置かれている。彼が左手に掴んでいるのは物差である。窓外遥かにニュルンベルク城が見える。

175 v.　錠前，鍵鍛冶屋

錠前，鍵の鍛冶職人の Georg Sauer は1680年７月１日，56歳の時入所。1684年５月27日死去。626番目の兄弟である。

職掌がら（M-Ⅰ，**143.** 商学313号，p. 228），軽率に人を全面的に信頼したため，気の毒にも不正な人物と見なされてしまい処罰され，牢獄の穴に押しこめられたことがあった。

煉瓦積みの仕事部屋，同じく煉瓦積みの鍛冶炉，そして炉にはリンク機構の送風器がついていて炭が赤々と燃えあがっている。その傍に炭つかみが横たえてある。

彼は作業台に据えつけたねぢ式立万力に鍵をしっかりとくわえて，粗いヤスリで手を加えている。台上には出来上った鍵と大変芸術的に仕上げられた，がっ

しりした錠前金具及び扉の蝶番金具が置いてある。背後の木台には金床と金槌が見られる。

176. 荷馬車引き（馭者）

荷車を引いて商いをして歩く行商人の Georg Christoph は1608年 5 月29日，67歳の時入所。彼は辛抱強い勤勉な人物であったが，病弱で肺結核患者であった。その為1684年12月31日，病床に就いて僅か14日間で死去した。この時代の病人の取扱いや痛みの処置はひたすら神の加護を期待して祈り，なぐさめ，我慢させてしのぐだけであった。その有様は，痩せ衰いた彼の顔付の描写によく示されている。627番目の兄弟。

彼は飾りボタンが沢山ついている灰色の長コートを羽織り，首には白いリボンを結び下げている。左手に鞭，右手で濃い栗毛の馬を御している。馬には近代的な馬具がつけられている。彼の愛想のよい沈着な顔は色も悪く頬はこけ落ち，いかにも苦しそうな生気のない様子で，その苦しさをじっと耐えているのがひしと伝わってくるのを感ずる。行商人の彼はその苦しみに耐えて，悪路，馬を上手に御して大きな荷を急ぎ運んでいる。荷車の大きな車輪には鉄輪がはめ込んであり，しかも滑らないように大釘の頭が出ている。

176 v. 靴修理屋

古靴修理の Johan Schalck は1680年11月 8 日，71歳の時入所。1687年 1 月17日，月曜日死去。628 番目の兄弟である。

作業机の上に修理し終えた 1 足の長靴と深靴の片方が置かれている。今彼は出来上った長靴の片方を誇らしげに捧げもって示している。この靴にはまだ木型がはめこんであり，その背面，膝から踵まで等間隔に美麗なホックが飾りを兼ねて整然と取りつけてある。履く時にはホックをはずし，背を割って開いて履くのである。誠に軽やかなきっちとした仕上である。

177.　管理人

金細工師であり亦エッチング職人でもある Johan Reinhold Mühl は1681年9月25日，当館の管理人としてやって来た。彼が50歳の時である。彼は現在の当館の理事者 Kreßenstein の Jobst Christoph Kreß 殿の御抱えの職人であった。Ihro Hoch Adelichen の出身である。

彼は館の制服を着け，左手に沢山の鍵を通した輪を下げ，事務所の中央に立っている。事務所は二階の室で，バルコニーに面した出入口の扉は開いていて隣の建物が見える。その建物の煙突の上にこうの鳥が巣をつくり，雌が卵を抱えている。そして餌を運んで来た雄がその傍に立っているのが見える。事務所の一隅，扉の傍には立派なタイル製暖炉（Kachelofen）が据えられており，中央には緑色のカバーを掛けた机が置いてある。机上の書写台には大きな帳簿が開げられており，傍のインク壺にはペンがさしこんである。金細工師のような，職人の中でも地位の高い職人は可成りの教育を受けており読み書きそろばんがよく出来た。

177 v.　漁師

魚屋の Georg Engelbrecht は1681年10月6日，63歳の時入所。彼は勤勉で清潔な人物であったが，急性の結核にかかり1684年8月14日の朝死去した。629番目の兄弟である。

木骨構造の太い木骨があらはになっている川辺の作業小屋に設けられている机に大きな盥桶を置き，その中から今日獲ってきた大きな鯉を誇らしげに取り出して見せている。盥の中にはまだ他の魚が泳ぎ廻つているようだ。

小屋の傍の川では3人の漁師が竿をあやつって魚を獲っている最中である。川の向う岸には緑の葉を茂らせた大木が何本も並んで川面に影を落している。梢の遥かむこうに教会の尖塔が見える。

178. 組み紐作り

組み紐作りの Johann Lipert Frentz は1681年12月 7 日，69歳の時入所。1698年 5 月12日，85歳で死去。630番目の兄弟である。

館の制服を着た彼は，製品の赤色の組み紐の束を示している。そして薄板に巻いた緑色の同様の組み紐が作業台上にある。

178 v. 織物工兼織地見本作り

織物職人で亦英国製織物地の見本作りである Johann Burger は1682年 1 月30日，72歳の時入所。物静かな温和な人物であった。甚だしい結石症の痛みにいつも悩まされていたが，1688年 5 月14日，月曜日の早朝死去した。78歳であった。631番目の兄弟である。

今彼は天井から吊り下げてあるグリーンの織り地を 3 脚椅子に腰を下ろして，手鋏で不都合な箇所を調整し仕上げているところである。

179. 刃物鍛冶

刃物鍛冶の Peter Kalmbach は1682年 7 月20日，80歳の時入所。病弱な老人であったので 1 年も経ぬまに，即ち1683年 7 月 2 日死去。632番目の兄弟である。

余り顔色のよくない彼が鍛冶炉の前で，木台に据えた六角形の金床の上でナイフを鍛えている。館の制服の上に革の前掛けをし，首には白布をネクタイのように結んでいる。鍛冶炉はシックイが所々はげ落ちていて，下積みの赤煉瓦がのぞいている。炉の造り方，構造が分る。

179 v. 粉屋

最初は粉屋であったが，後に火酒醸造者になった Hans Cilget は1685年 6 月25日，67歳の時入所。仕事好きでよく働く人物であったが，当所に居る間に視

力を失い亦肺結核になり，1690年6月6日死去した。633番目の兄弟である。

四角な広幅のリネンの衿飾りのある館の制服を着た彼が，石積の倉庫で，一杯ではち切れそうになっている粉袋の口を締めている。窓外には赤いスレート屋根の2階建の家が2軒並んでいる。何れもニュルンベルグ特産の赤味のある砂岩で積んだ家である。この2軒の間には2台の水車がこれまた並んで回転している。手前の家の壁には石臼が立てかけてある。

彼は当初は田舎で粉屋をしていたが，その後火酒醸造所の経営者となった。一般に粉屋は収入が豊かで村でも有力な人達が多かった。しかし村民からは，粉の量をごまかしたり，混ぜものをしたりしているのではないかと常に疑いの目を以つて見られていて信用は薄かったのである。

180.　真鍮細工師

真鍮細工師の Hanns Thoma Maurer は1684年6月30日，60歳の時入所。もの静かで勤勉な人物であった。いたるところの関節が痛風に見舞われ，遂に半年ほど寝込んでしまい，1690年6月29日の日曜日，痛みのうちに死去した。634番目の兄弟である。

四本脚の椅子に座して真鍮製飲み口の鋳物を手にしている。今彼はコックの入る部分のすり合せが完成した品物を薄紙にくるんでいるところである。室の隅には送り出すばかりにした種々な真鍮製品が薄紙で包装されて並べられている。

180 v.　砂時計作り　**Fig. 110**

砂時計作りの Jacob Wagensail は1684年10月2日，63歳の時入所。1692年，71歳で死去。635番目の兄弟である。

木彫り飾のされている机に向って，完成したばかりのグラス4個連結の砂時計セットに手を置いて，ほっとした顔をしている。机上にはグラスを支える真

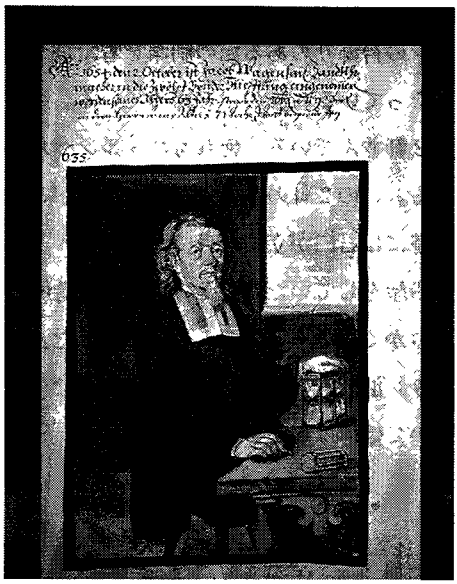
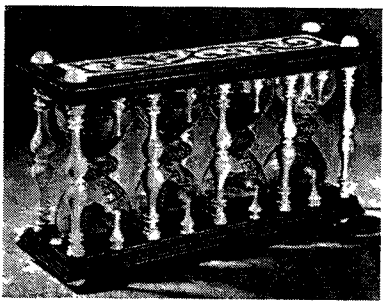


Fig. 110 砂時計作り
(Amb. 317 b. 2°, Bd Ⅱ-2, 180 v.)

鍮製の枠が転がっている。

砂時計はくびれた腰をもつ梨形のガラス容器，グラスと呼ばれる部分とグラス部分を支持し保護するための枠の二つの部分から構成されている。2個のグラスの腰のくびれた部分を合わせて8の字形に作り，その合わせ目に小さい孔をあけた薄い金属板を差し込み，そして粗い麻布の帯を入念に巻いて接合する。この部分，所謂「蜂の腰」は一番こわれやすいところであるので，更に革帯で巻き補強する。亦美しい撚糸や絹布の組紐，金・銀線などで種々な模様にかがり，美しく飾ることが行われる。接合部に差し込んだ小さい孔のある金属板は調速器即ち砂の落下状態を調整するものである。2個のグラスを合わせて8の字形に作るのでなく，一体のガラスで作るようになるのはガラス工業の技術が進んで容易に細工が出来るようになってからのことである。



1/4, 1/2, 3/4, 1時間用セット〈黒檀，象牙柱，象嵌枠，1720，イタリア製〉（Time Keeper, Fab Ward, London）

1/2, 1時間用セット（砂時計の書，E，ユンガー，人文書院から）

銀製金メッキ枠〈H. 8.5cm, 1506年〉（Nbg. Germanichen, Nationalmuseum）

Fig. 111

砂時計の一番弱い部分を直接手で握られないように保護し，更にグラスを垂直に立てて置いたり反転させたりするためにグラス部分を枠の中に収める。枠は上下2枚の板（帽子と呼ぶ）を何本かの支柱でつないだものである。帽子は組み上った砂時計がテーブル上に横にして置かれた時，転ろがらないよう円形よりも四角，六角或いは八角形に作られることが多かった。枠には真鍮，銅，鉄，貴金属，角，象牙，黒檀，木などが用いられた。グラスの中に入れる砂には入念に粉末にし，篩にかけ洗滌した大理石の粉末，焼いた卵の殻の粉末，錫

や鉛の粉末，岩石の粉末，ヴェネチアの砂と呼ばれる重い金属粉…を使用した。

砂時計は時刻を知るためのものではない。教会や修道院での祈禱時間，聖書朗読・説教時間，学者の学校での講議時間或いは船員の当直勤務時間，船の速力測定用の時間更には家庭で卵をゆでたり脈伯を数えたりする際の時間のように比較的短い一定時間の計測用に使用されたのである。従って用途により14秒，3分，15分，30分，1時間，2時間用など各種のものが作られた。亦途中の経過時間も分るように，例えば教会の説教用に1/4，1/2，3/4，1時間用のものを一つの枠に並べてセットにしたように，各種のグラスのセットが作られた。

砂時計がいつ，誰によって発明されたのか？　ローマ時代から使用されていたとか，8世紀シャルトルの僧侶リウトプランド（Liutprand）により考案されたとかいう説もあるがよく分っていない。14世紀か15世紀の初めヨーロッパで発明されたらしいというのが最も確かなようである。砂時計の製作に携わった職人は錠前屋や金細工職人，ろくろ細工職人，機械時計職人など種々であった。誰もが製作してもよい自由工芸であった。しかし17世紀後半には専問の製作職人が存在するようになり，ギルドが組織されていたとクリストフ・ヴァイゲルは記している。砂時計は機械時計より安価でしかも静かであったので人々に好まれ広くひろまったが，やがて機械時計の改良進歩，とりわけ急速な低廉化と共に姿を消すにいたった。

(1990.5.28)

参考文献

(1) Karl Fischer, Register zu den Mendelschen Zwölfdrüde Büchen der Stadtbibliothek Nürnberg.
(2) Margarete Wagner, Nürnberger Handwerker; Bilder und Aufzeichnungen Aus den Zwolfbruder häusen 1388-1807. Guido Pressler verlag Wiesbaden.
(3) Margarete Wagner, Das alt Nürnberg; Ein blick in Vier Jahrhunderte Handwerksleben. Guido Pressler Verlag Hürtgewalt.
(4) Germanisches Nationaimuseum Nürnberg. Prestel verlag, München.
(5) Das Hausbuch der Mendelschen Zwölfbrüderstiftung zu Nürnberg. Textband. Bruckmann München.

(6) Schatzkammer Der Deutschen Aus den Sammlungen des Germanischen Nationalmuseums Nürnberg, U. E. Sebald Druck und Verlag GmbH, Nürnberg.
(7) A History of Technology, Vol. 1, 4, Edited by C. Singer. etc, Oxford at the Clarender Paess.
技術の歴史，平田寛編訳，第１，６巻，筑摩書房，昭和39年
(8) Das Ständebuch von Jost Ammann mit Reimen von Hans Sachs, Erschienen in Insel verlag, 1960
西洋職人づくし，小野忠重解題，岩崎美術社，1970
(9) Klaus Maurice, Von Uhren und Automaten. Prestel Verlag München.
(10) Fab Ward, Timekeepers, Waterlow & Sons Ltd. London, 1963.
(11) Bibel, Die Heilige Schrift des Alten und des Neuen Testaments, Verlag Der Zürchen Bibel Zürich, 1971.
(11) 鉄の歴史，ルードヴィヒ・ベック，Ⅰ(3)，昭和52年，Ⅱ(2)，昭和53年，たたら書房
(13) ヨーロッパ中世経済史，クーリッシェル，東洋経済，昭和58年
(14) 中世職人史，ピェール・ブリゾン，西田書店，1923
(15) 中世の職人Ⅰ，Ⅱ，ジョン・ハーヴ，原書房，1986
(16) 中世ヨーロッパ都市と市民文化，フリッツ・レーリヒ，創文社，昭和57年
(17) 中世都市，アンリ・ピレンヌ，創文社，昭和58年
(18) 砂時計の書，エルンスト・ユンガー，今村孝訳；人文書院，1978，７，講談社，1990，３
(19) 生活の世界歴史(6)，中世の森の中で，堀米庸三，昭和58年５月，河出書房新社
(20) 月刊百科，「快楽の園」のコスモロジー（上），神原正明，平凡社，1990，1，No. 327.
(21) 年貢を納めていた人々，坂井洲三，法大出版，1986，９.
(22) ケンブリッジ旧約聖書注解，新教出版社
13巻　ロジャーソン，マッテイ，村上達夫訳，詩編１～75
15巻　ワイブレイ，松浦大訳・箴言
(23) 現代カトリック事典，ジョン・A・ハードン，エンデルレ書店，昭和57年
(24) 新潮世界美術事典，新潮社，昭和60年